

## ポストクの流儀

### 悩みを解きほぐして今日から行動するためのチェックリスト

Liz Elvidge, Carol Spencely, Emma Williams 著, 小谷 力 翻訳, 羊土社 発行

(出版年月) 2020年2月, 262 pp. 定価 3,200 円 (本体)

本書は、インペリアル・カレッジ・ロンドンのポストク開発センターにおいて、ポストク・コミュニティーへの支援を行ってきた方たちによる知識と経験を一冊の本としてまとめ、より広範な人々に伝えることを目的としたものである。現役のポストクやその予備群にとっての「入門書」としてだけでなく、ポストクの管理責任者である研究者にとっても必読書であると薦めている。内容は以下のような構成になっている。

- 序, 謝辞, 日本語版発行に寄せて, まえがき
- 第1章 ポストクという選択
- 第2章 英国の高等教育の背景
- 第3章 研究者として英国に渡る: 海外へ渡る人への教訓
- 第4章 ポストクという立場で働くことを最大限活用するには
- 第5章 研究責任者 (PI) との関係
- 第6章 論文発表と生き残り
- 第7章 教えることと監督すること
- 第8章 移転可能なスキルの開発とチャンスのつかみ方
- 第9章 効果的な人脈形成の要点
- 第10章 予測可能な研究—リスクと見返りのバランス
- 第11章 生産性を高め、ストレスを減らし、プレッシャーを軽減する
- 第12章 研究の多様性
- 第13章 研究構成と倫理
- 第14章 キャリアと意思決定に対する責任
- 第15章 学術界を超えるキャリア
- 第16章 フェローシップ
- 第17章 「講師への飛躍」(講師職: 仕事の内容と応募方法)
- 第18章 成功する履歴書の書き方
- 第19章 面接と質問
- 第20章 結論: 今、あなたに知ってほしいことは?
- 第21章 あなたへ

本書は、特に博士課程の学生や現在ポストクとして研究活動を行っている者に薦めるが、研究責任者 (PI) やポストクを経ずに研究職にありつけた“ラッキー”な方たちにもぜひ読んでもらいたい。本書は、英国における研究事情を反映しているため、一部、我が国の研究事情とは異なる

点はあるものの、大部分は参考になる内容である。特徴的な点は、項目ごとにチェックリストを設け、“読者も手元にノートを用意して、読み進みながら自分の考えを書き付けてください”と薦めているように、“能動的に”読むことができる点である。

冒頭“日本語版発行に寄せて”における以下のようなやり取りは、ポストク経験者であれば、聞いたこともあるだろう。

「それにしても、どうしてこんなラボに来たんだ？」

「ん？ どういうこと？」

「ボスのウォルターはほとんど面倒を見てくれないし、ポストクのほとんどはPIになれずに死んでいるよ。」

「ええっ!!?? 本当に？ えらいこっちゃ」

また本書の“序”の最初の一文が「ポストクは楽なものではありません」と始まるように、なぜ“ポストクを選択する”のかということをよく考える必要があると説いている。

第1章では、本書を読み進める上で、著者らが何度も読者に伝えている一文がある。

1. ポストクはキャリアではなく、次に進むためのステップである。
2. ひと (People), 場所 (Place), プロジェクト (Project) の3つのPが大事である。

“ポストクを選択”したのならば、常に上記2点を特に意識しながら“ポストクという立場を最大限に活用”して、自分の未来を“戦略的に”切り開いていく必要があるからだ。特に2点目は、自身も2か所でのポストク経験から“3つのP”の重要性について大いに共感できた。例えば、「インターネット上で閲覧できる公募情報には、ポストクに分類される人材公募が多数掲載されている。しかし、その職務内容や雇用形態は、ポストクという一つの枠組みでひとくくりには出来ないほど多様である。それを知らずに安易に雇用契約を結んだ結果、思い描いた研究生活とかけ離れた現実に直面し、期待したような研究業績を挙げられずに苦しむポストクを何度も見てきた」(宮本英揮, 土壌の物理性, 114, 87-88, 2010)ということもあるからだ。とにかく、人生に岐路となる“ポストクを選択”することには、十分な慎重さが求められる。

第2, 3, 15, 16および18章に関しては、どちらかという英国やヨーロッパの諸外国での研究を考えている者にとって有用な内容となっている。しかし、諸外国の研究事情を知る上では参考にすべき箇所も多く、我が国の研究事情にも応用できることもあるだろう。第12章“研究の多様性”および第13章“研究公正と倫理”は、研究に従事する者

すべてが常に意識すべき必要不可欠な事項であろう。

第4～14, 17, 19～21章は、国を問わず研究に従事している者に共通して大事な事項が含まれており、次に進むことを目指しているポストドクにとって特に重要な章であろう。第4章ではポストドクという立場を最大限に活用し、ポストドクで成功する人の特徴や要素について概説し、第5～11および14章において、ポストドクで生活をよりよく過ごすための思考や行動様式などが詳細に述べられている。これらの章は、ノートを片手に、自身もチェックリストと照らし合わせながら、入念に読み進めることをお勧めする。ポストドク期間で最も大事なことは、論文発表等の成果を挙げ、テニユアのポストへつなげることであろう。その論文発表に至るプロセスで、改善できる点、研究スキルの向上・研鑽、人脈形成など、ポストドクという立場を最大限に活用し、得られるものを最大化する“コツ”を同章では確認できる。第6章の「論文発表と生き残り」をするためには、必然的にPIと適切なコミュニケーションを取りながら(第5章)、研究/技術の向上(第5章、第8章)、移転可能なスキルの開発(第8章)や人脈形成(第9章)し、時にはチーム員の教育(第7章)もしつつ、チームとしてプロジェクトを成功に導く必要があるだろう。以上を通して、優れた研究を行うことで、PIとして独り立ちする道が開かれるのではないだろうか。第5～11および14章はそれぞれ独立した章であるが、それぞれの事項をうまく調和させることで、ポストドク期間を最大限に活用し、「ポストドクの次のステップへつなげることができた」となるのだろう。本書の「僕も、ポストドクのときにこの本を読んでいれば、より成功したポストドク生活を過ごせていたかもしれないな」(藤田恭之)という一文には同感である。

ポストドク生活は決して楽なものではないことを、多くのポストドク経験者は知っている。自身のポストドク時代を振り返ってみても、もっとも困難な時期であったことは間違い

なく、多くのポストドク経験者も同じ気持ちであろう。限られた時間の中、常に迫りくる任期と背中合わせの生活を送りながらの研究活動、落ち着く間や心休まる時も無く、ワークライフバランスという言葉は、まるで夢物語のようなものであったことだろう。数少ないポストの公募書類を作成・応募するものの、公募戦線は熾烈を極めており、幾度となく挑戦し続けてきた。このような状況は常態化し、周りを見回しても疲弊するポストドクは少なくなく、志半ばで研究の道を諦め、進路変更を余儀なくせざるを得ない者も多く見てきた。幸い、私は現在も研究を続けることができているが、過酷なポストドク時代に得られたものは多く(二度と経験したくはないが(笑))、研究/技術の向上はもちろんのこと、研究観にも大きな影響を及ぼし、そして、かけがえのない仲間ができた。同じ時代を共に過ごした仲間との絆は今でも強く、常にお互い意識し、励まし合いながら過ごしているのではないだろうか。そんなことを思っていたとき、日本学術振興会に次のような記事が掲載されていた。「これまでに、途中で研究の道を諦めた同世代の人たちをたくさん見てきました。私は東大にポストを得て2005年に帰国しましたが、その人たちの分まで頑張ろうという気持ちで研究を続けてきました。」(加藤健太郎, 独創の原点—私の「特別研究員・海外特別研究員」時代, 日本学術振興会, 2018年8月)。このような想いを持って研究を続ける同年代のポストドク経験者が他にもいることを知り嬉しくなった。

ポストドクを経て大学や研究機関でテニユアポストを得た研究者の中には、日々の業務に追われるように過ごす中、時として研究への情熱が薄らいでくることもあるだろう。そんな時は本書を読み返すことで“ポストドクを選択”した当時を思い出しながら、もう一度フレッシュな気持ちで研究と向かい合う機会を得られるかもしれない。

(農研機構 北海道農業研究センター 白井靖浩)